

## 短 報

高齢者の生活史理解の  
重要性について

旭川敬老園\*

山室 愛美・相野 梨恵  
森 繁樹キーワード 高齢者 認知症 介護  
生活史 できること、強味

## 1. はじめに

私(山室)は今年4月に旭川荘に入り、旭川敬老園に配属され、約8か月間高齢者の介護に携わってきた。高齢者の介護に携わる中で、介護とは「生活支援」であると言われても、現場の介護場面では、どうしても食事、入浴、排泄といった三大介護に目が行ってしまっていた。しかし、認知症はあっても身体面は元気で、本人なりに自分の意思をはっきりと表すことのできるAさんへの介護を通じ、三大介護だけではなく、高齢者介護においては生活史を理解していくことが重要であるということを実感することができた。そこで今回、Aさんへの生活支援経過をまとめ、紹介する。

## 2. 事例の紹介

## 1) 事例対象者

Aさん 性別：女性 年齢：91歳

要介護区分：要介護3

主な疾患：アルツハイマー型認知症、骨粗鬆症

性格：穏やか、世話好き、気を使う、我慢強い

ADL：ほとんど自立しているが、声掛けや見守りが必要

特性：言葉、身振り・手振りを使ってコミュニケーションを図ることが可能

認知、記憶、見当識障害あり

社会福祉法人旭川荘(理事長 末光 茂博士)

\*特別養護老人ホーム

意思疎通、意思決定は難しい(可能なこともある)毎日面会に来られる次男さん夫婦の顔は覚えている

よく歩かれるが、転倒リスクが高い

## 2) 支援経過

## (1) 入所当初のAさんの様子

転倒リスクが高いが、落ち着かないとフロアを早足で歩かれるため、他入居者の下着交換時や食事介助の際にも見守りが必要な状態であった。座っていてほしいと職員が声を掛けても中々納得されず、座ることを拒否されることもあった。「どうしたらいいですか?」「何も分からないの」ととても不安そうな様子で職員に訴えられることも度々あった。Aさんはとても穏やかな人であるが、転倒して骨折したり、顔からこけて顔に痣を作ったりと、職員の中で困った人、怪我をしそうで怖い人という印象があった。

一方で、とても穏やかな人で、他入居者の目を見て一人ひとりに挨拶や話しをしたり、ひざ掛けをかけてあげたりと他入居者にとっても気を配っておられた。

## (2) 私の思い、私が問題と感じていたこと

私が問題だと考えていたことは次の2点である。

## ①徘徊

Aさんは転倒リスクが高いが、落ち着かないとフロアを早足で歩かれることが多かった。また、職員が仕事をしていると、「私はどうしたらいいですか?」と声を掛けて下さることもあった。食事介助や下着交換の時間に見守りをすると他の業務が回らず、フロアスタッフは頭を悩ませていた。Aさんは何か理由があり、動かれているにもかかわらず、スタッフ側の認知症ケアの知識不足のため、困った人という印象があった。フロアを早足で歩かれると、転倒のリスクがあるため、ソファーに座ってもらう、話をする等して落ち着いて貰うのがよいだろうと考えていた。

## ②水分を摂ろうとされない

Aさんは水分をあまり積極的に摂ろうとされない人である。食事中も汁、お茶が中々進まない。また、おやつ(水分補給)時にも中々水分を摂ろうとされない。ご自分の水分を他入居者に「飲んで下さい」

と手渡すことも度々あった。脱水になっては困ると考え、「一口でもいいから飲みましょう」等、無理に水分を勧めることもあった。

### (3) 支援方法の検討

まずは①徘徊②水分を摂ろうとされないという2点の問題を中心に、Aさんへの支援方法を職員間で検討した。話し合いの中で、これまでAさんが生きてきた生活史を探ることが、Aさんへの支援方法を導き出すことに繋がるのではないかと考えた。また、先輩職員から「できること、強味」を活かした支援を考えてはどうかという助言をいただき、ご家族、キーパーソンである次男さん夫婦から聞き取りを行った。

### (4) 入所までの経緯

B県で出生。C県で育ち、女学校を卒業する。その後親族がいたD県に疎開し、結婚する。ご主人と結婚後、3人の息子をもうけられる。結婚後に喫茶店を開業される。ご主人は外に出掛けられることが多く、いつも店を一人で守っておられた。近所付き合いはすべてご主人が行っていたため、本人は近所も出歩いたことがなく、迷子になることもあった。ご主人の他界後も喫茶店を営まれる。5年前の暮れ頃より、「鍵を閉めたか？」等いつもより気にすることが目立ちはじめ、その後「私は何をしたらいいの？」等と言われ、認知症であると思われる言動がみられはじめる。自宅での転倒を機に更に混乱が激しくなり、ショートステイを緊急利用され、グループホームへ入所、その後当園（旭川敬老園）に入所となる。

### (5) 家族からの聞き取り情報

Aさんのキーパーソンである次男さん夫婦は短い時間であっても、ほとんど毎日面会に来て下さる。毎日少しずつ、時間をかけて次男さん夫婦よりいただいた情報を紹介する。

- とても優しい母親であった。
- 声を荒げて怒られたことがない。
- 喫茶店を営むことが生きがいであった。
- どんなに喫茶店が忙しくても愚痴をこぼしたことはない。
- 喫茶店の常連さんをととても大切にしていた。
- 常連さんが亡くなられ、酷く落ち込んでいた。その後認知症の症状が現れはじめた。

等の情報をいただくことができた。

### (6) 推測されたAさんの思い

#### ①徘徊する意味は？

徘徊だと一方的に決め付けていたが、Aさんとはとても気を使われる性格で、職員が動いているのに自分がじっとしているのは申し訳ない、自分には何か出来ないかという思いから動かれているのではないかと考えた。

#### ②水分を摂ろうとされない意味は？

水分を摂ろうとされないことが問題だと考えていたが、Aさんは一人で喫茶店を営まれていたということから、トイレの心配もあり、水分を摂ることを控えられていたのではないかと考えた。また、水分を定期的に飲む習慣がなかったのではないかと考えた。

### (7) 支援方法

Aさんの思いを推測し、「できること、強味」を活かした支援方法、支援上の注意点を職員間で話し合った。

#### ①徘徊

～徘徊だと考えず、無理なく動いてもらうために～  
 ≪Aさんにできること≫

○Aさんに何か仕事（役割）を持っていただいてはどうかと考え、昔喫茶店を営まれていたAさんに、食後の洗い物をお願いしてみた。

#### ≪支援上の注意点、その他支援方法≫

○無理強いはせず、体調や気分等をご本人に確認しながら、洗い物をお願いする。

○一緒にする、丁寧な声掛けをする等の本人へのサポートを継続する。

○洗い物を始める際には、スポンジを手渡す。また、洗った食器を置く場所が分からずに不安そうな顔をされたり、一度洗った桶の中に再度食器を戻されたりすることがあるため、「洗った食器はこちらに置いて下さい」等の声掛けを細かく行う。

○洗い物後は労いの言葉をかける。

#### ②水分を摂ろうとされない

～自然に水分を摂ってもらうために～

#### ≪Aさんにできること≫

○ご自分で作った水分であれば水分を摂っていただけるのではないかと考え、一緒にする、丁寧な声

掛けをする等の本人へのサポートを継続しながら水分と一緒に作っていただく。

#### 《支援上の注意点、その他支援方法》

- 無理強いせず、体調や気分等をご本人に確認しながら、水分と一緒に作っていただく。
- カップ、スプーン、コーヒー、牛乳等は職員が準備する。見守りをしながら、「カップにコーヒーを入れて下さい」等の声掛けを細かく行う。
- 無理に水分を勧めない。
- 時間を空けて再度水分をお出しする。タイミングを工夫する。
- 他の入居者とともに水分を飲んでいただく。
- 喫茶店で使われていたカップをご家族が持って来て下さっているため、そのカップで水分をお出しする。
- お好きな甘いコーヒー、紅茶、ジュースをお出しする。

#### (8) Aさんの変化

##### ①徘徊と思われた行動について

～できる仕事や役割は？～

最初は「どうしていいかわからない」と言われ、中々上手くいかず、職員は時間ばかり取られ、やはり無理なのだろうかと感じられることもあった。しばらく本人のサポートを続けながら、洗い物を続けていただいた。その結果、徐々にできることも増え、昔からよく行っていたであろう洗い物で、当時の感覚が戻ってきたかのように、手際よく丁寧に洗い物をして下さるようになった(図1、2)。最近では、食後に腕まくりをしながら職員に、「洗いましょうか?」と声を掛けて下さることもある。ご本人もご自分に仕事(役割)ができたことに安心されたようで、不安そうな様子で「私どうしたらいいですか?」と尋ねて来られることも減り、穏やかな様子で過ごされることが多くなった。また、昼食後に洗い物をお願いすることが多いのだが、昼食後に洗い物をして下さった午後は比較的落ち着かれていることが多く、ソファにて傾眠されたり、テレビを見たり、他入居者と談話したりされていることが多いということが分かった。洗い物後に労いの言葉をけると、「私にもできることがあるのね」「このくらい任せて」等と言って下さり、ご自分に仕事(役割)がで

きたことをとても喜んでおられるように感じられた。ご家族からも、「元気になり生き生きしている」と喜びの声をいただけるようになった。

##### ②水分を摂ろうとされない行動について

～水分は十分に摂れているか?～

無理強いせず、少しでも水分を摂っていただけるよう工夫を凝らしたことで、少しずつ水分を摂っていただけるようになった。コーヒーと一緒に作っていただくと、「砂糖はいっぱい入れないとね」「皆さん甘いのが好きかしら?」等、喫茶店をされていた当時の感覚が戻ってきたかのように、話して下さった。また、「自分で作ったら美味しいわね」と笑って話されることもあった。また、喫茶店で使われていたカップで水分をお出しすると、カップを手に取って眺めながら「懐かしいわね」等と言われ、水分を自ら飲んで下さることもあった。



図1 昼食後に洗い物をして下さるAさん



図2 昼食後に洗い物をして下さるAさん

### 3. 考察

私の当初の発想は、「目に見える問題行動」への対処にしか過ぎず、職員本位の支援の提供となってしまう。それゆえ、生活史やできること、強味を除外した生活支援を提供してしまっていたことに気付いた。また、徘徊、水分を摂ろうとされないという2点の問題に対して、私は困った認知症高齢者という見方（冷たい観察的・分析的な見方）をしており、更にAさんの不安を煽っていたことに気付かされた。

前述したように、Aさんの生活支援に携わる中で、先輩職員より、「できること、強味を活かした支援を考えるとどうか」「今のその人を見るだけでは、その人の全体像は見えてこない」「その人の生活史、生活習慣を知らないとその人の全体像は見えてこない」とアドバイスをいただいた。大学で学んできたICFの視点に立ち、入所から現在までの記録、これまで支援に携わってきた職員から情報収集、ご家族から情報収集、職員間で支援方法の検討を行った。Aさんの人柄や生活史等を知ることができた。そこから、Aさんのできることや強味、生活習慣ややりたいことがみえてきた。その人の人柄や生活史等を知ること、その人の全体像が見え、その人を多角的に理解し、介護に生かしていくことができることを学ぶことができた。

### 4. まとめ

介護とは、利用者本人の生活を再構築することである。要介護状態になれば、これまでの生活を犠牲にしなければならないと考えてしまいがちである。また、「認知症高齢者は自らを語ることなく、行動で思いを示す」という言葉の意味が、働き始めた当初はよく分からなかった。しかし、施設に入所後もこれまでの生活を維持出来るように支援していくことが介護職員には求められているのではないだろうか。

認知症になると自分の思いや考えを言葉にして伝えることができる人は多くない。行動にその人の思いや考えが投影されることも多いため、その人を支援していく介護職員が生活史や人柄を過去から探り、その人の行動から思いを読み取っていくことが介護職員には求められている。今回、「認知症高齢者は

自らを語ることなく、行動で思いを示す」ということをAさんへの支援を通して実感することができた。

Aさんへの生活支援を考察してみると、Aさんが変わったように思われるが、Aさん自身は何も変わってはいないと感じる。職員がAさんの思いに気付かなかったことからAさんは混乱し、職員がAさんの思いに気付いたことからAさんは安定されたのだと考えることができるのではないだろうか。つまり、職員の知識、経験不足をAさんのせいにしてしまっていたが、利用者ではなく、職員の側や生活環境を変えていくことが介護の専門性ではなかっただろうか。

介護職員は支援を行っていく上で、その人のできないこと（支援が必要なこと）に着目しがちであるが、アセスメントを丁寧に行うことで、その人が「何ができる人なのか」「何が強味なのか」「何がしたい人なのか」ということがみえてくるということが分かった。できること、強味に着目した支援を行うことで、職員主体の支援ではなく、入居者主体の支援を提供していくことができるということも分かった。

今回Aさんに行った支援は、Aさんには上手く当てはまったといえる。しかし、入居者一人ひとりの思いや考えは異なるため、他の方に同じ支援を行ったとしても、同様の結果になるとは限らないだろう。話をすることで落ち着かれる方、散歩に行くことで笑顔を見せられる方々様々である。職員がよかれと思い、役割としてやっていただいたことが、負担や不満になってしまうケースもある。介護は作業ではなく、一人ひとりの「生活支援」である。入居者が何を考え、何を求めているのかを常に探りながら、入居者の生活を一番身近でサポートする介護職員として、一人ひとりの生き方や生活のあり方を理解し、個別的な支援ができるように努めていきたい。

### 5. 参考文献

- 森 繁樹(著) 2015 事例で読み解く介護過程の展開 根拠に基づく「生活支援」を実践するために 中央法規出版株式会社
- 森 繁樹(著) 2011 介護のちから 中央法規出版株式会社